しつけの基本法則

波多野完治

「親と子との悪い相互関係の原因は、しばしば、親が子どもの年令を考慮することができないためである。親は自分の目のまえで伸び、成長していく子どもの発達に、しばしば気づかない。親には子はいつまでも小さいものに思える。そしてそのゆえに、親はしばしば子の、こまごました世話をやきすぎ、まさに子ども自身に、一歩ふみ出すことを許さないのである。親のこのこまごました世話は、子の成長した力と対立する。」

もう一つ。

「とくに有害なのは、両親のあいだの「家族的口論」である。このときには、両方の側がしばしばおたがいに、重大な悪口と批難とをあびせかける。このような口論は子どもからみれば、かれらの気分を圧迫するように作用する。まったく許しがたいことは、親が口論に子どもをひき入れ、おのおの自分の側につけようと努めるときである。これは破滅的に子どもに作用する。親は子どもをして一方の親に反感をいだかせ、このことによって、自分の威信をも、他方の威信をも低める、これと同時に子どもを自分の側につかせようとすることは、子どもを自分の親に対して、いつわりの困難な状態においこむことになる。」

以上二つの引用をした。一体これはどこの何という本の引用か、とおもうだろうか。

これはソ連の教育学の本からの引用なのである。オゴロドニコフ、シンビリヨフ共著「ソヴイェト教育学」の——勿論訳本——家庭教育のところにある。

だが、わたくしには、これはソ連の本ではなくて、日本の家庭教育の本にあってもよいようにおもわれる。日本のだ、といっても、だれもウソとはおもわないだろう。日本の家庭教育論としても立派に通ずる、それ程健全な考えである。

この二つの引用ばかりではない。このソ連の教育学教科書にはこういう「真理」がいたるところにある。鉄のカーテンの向うから、というが、それは決してこっちがわと正反対の人間をつくっているのではなく、こっち側で正しい人間に考えられるものは、向うがわでも——出世が出来るかどうか知らぬが——正しい立派な人間なのであるらしい。

二つの世界、というようなうたい文句でわれわれは、むかい側とこちら側の「差」を、あんまり大きく考えすぎていたのではないか、とこのごろわたしは気づきはじめた。

人間の生活には基本的な法則があって、それがなければ社会生活はほろびてしまうのである。こういう基本法則は昔の社会と、今の社会とで、多少はちがうだろう。ちがわなければおかしいが、しかし、その違いのうちにも、ごく大まかな点は「社会存立」というギリギリの線で、共通性がみられるのではないか。

ことに、社会生活の最小単位である「家庭」というようなことになると、その共通性は著しく大きくなるのではないか。

こう考えてくると、われわれが、子どもを教育する上で、長い長い間かかってきずき上げてきたやり方——これをまとめたものが、育児法であり、教育学であるのだが——は、人類の文化遺産の一つなのであって、それをかるがるしく棄てることは出来ないものかもしれない。

わたくしなどは、社会の発展を重く考える立場から「新しい社会には新しい教育の方法がある」という

ので、教授法の改革を主張していたのだが、このような考え方は改めなければならないのではないか、とおもいはじめた。昔からすぐれた教師たちが長い間かかってきずき上げてきた教授法のうちには、非常にすぐれたものがあって、どんな社会になっても生きのこるような基本法則に立っているものが少くないに相違ない。そういう人類の遺産としての基本法則をみつけ、それを定式化する仕事が、われわれの仕事なのではないか、と考えついたのである。「しつけ」の方にもそういうことがあるに相違ない。但し、圧制的な社会には、圧制的なしつけが支配的になるので、一つの社会にある「しつけ」の体系のうちどれが「社会の存立に欠くべからざるもの」で、どれが「圧制社会だけに通用するものか」これをえりわけることが大切な仕事だ。そうして、この仕事も教育学の大事な研究の一部門にちがいない。

だが、ソ連の教育学からの引用についてはまだ外の考え方も可能なのである。

それは「ソ連はヨーロッパよりも、アジアに近い」ということである。

ソ連がいわゆる西欧と大変ちがったものをもち、そのちがいは、アジア的なものから来ている、というのはよくヨーロッパ人のいうことだが、前に引用した家庭のふんいきなども、ヨーロッパの家庭よりも、アジアの家庭の一特長なのかもしれない。そうして、アジアの一家庭で、という点で、日本とソ連とはにているかもしれない。

ソ連は社会主義の国で、日本は資本主義の国である。だが、家庭の中、というようなことになると、社会主義も資本主義も、そう大した差がないのではなかろうか。

こんな風に、ソ連がアジア的なものを多分にもっているとしたら、余計われわれはソ連の教育学を参考にする必要を多くもつわけだし、鉄のカーテンの向うがわだ、といって、これを毛ぎらいしていてはいけないことがわかる。世界中の教育のやり方を、もっともっと広くしらべてみる必要がある。学問の世界は、鎖国ほど損なやり方はない。